５.ゆかたの着装を含む授業実践と解析から考える指導法の提案

－中学、高校の実践の比較より－

○大矢幸江（横浜国立大学大学院生）
薩本弥生（横浜国立大学）

１．はじめに

今日、生活様式はほとんど洋風化され、和服文化は冠婚葬祭など人生の節目や季節のイベントにそのならわしが残る程度となっている。和服スタイルは単にその姿の継承だけでなく、日本に伝わる思いやりやもてなしの精神を受け継いでいくものでもある。新しいものばかりでなく、よき伝統文化を継承し尊重しようとする機運が高まっている。学校教育においても 2006 年の教育基本法の改正で「伝統と文化を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」等の目標が示された。それを受け、中学校の技術・家庭科の学習指導要領では「和服の基本的着装を扱うこともできる」と記載された。家庭科の授業で和服の着装をどのように扱うか模索されているが､なかなか普及していない現状がある。

そのような背景により、和服の着装の授業が進まない教師側の原因を調査し、昨年度その解析結果を発表した。今年はさらに、生徒側の校種による違いを明らかにしていく。中学、高校で行ったゆたか着装を含む授業を検証し、効果的な授業提案を報告する。

２．研究内容・方法

2.1 実施年度と校種,アンケート回答生徒数:

平成 25,26 年度、神奈川県内の中学及び高校 5 校でゆかた着装を含む授業を実施し、その前後でアンケートを実施した｡校種､学年、有効回答数を表 1 に示す。

表 1　実施年度, 校種, 学年, 有効回答数

学校名	年度	学年	男	女	合計
A 校	H26	県立高 3	4	17	21
B 校	H26	県立高 2	64	157	221
C 校	H25	附属中 1	61	73	134
D 校	H25	公立中 2	65	89	154
E 校	H26	公立中 1	63	69	132

2.2 実施内容：着装姿を見て、男女の違いや各部の名称を知る→男女それぞれの着つけの示範を見る→グループに分かれ TA1 名と一緒に自分で着装する→ファッションショーなど→たたみ方の示範と実習

2.3 実習前後のアンケート：講習前；①ゆかたや着物の経験、②ゆかたや着物への興味関心 6 項目,③衣服への興味関心 6 項目,④伝統文化 11 項目の経験度(なし:0,1 回:1,2 回以上:2) 講習後；⑤楽しかった点,⑥難しかった点,⑦気づいたこと,⑧ゆかたの着つけ 12 項目,⑨ゆかたを着た時の気持ち 7 項目,⑩ゆかたや着物についての考え 8 項目､②③⑧⑨⑩は 5 件法で,①は 2 択で、④は合計点の 3 以上を高群とし、⑤⑥⑦は自由記述にて回答を得た。アンケート分析により、中高生のゆかたやきものに関する実態を把握し、その後、校種による比較検討を行った。なお、5 件法の尺度は、(5:そう思う、4:ややそう思う、3:どちらとも言えない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)とし、4 以上を肯定的な回答とした。

３．結果及び考察

3.1 中高生のゆかたやきものに関する経験と実態

ゆかた経験有：73.3%(祭り、花火大会、旅館)、着つけ者：母や祖母、ゆかた所持：40.5%。きもの経験有：65.6%(七五三、正月、卒業式)、着つけ者：プロや母、きもの所持：13.3%。「ゆかたの着つけを自分でしたい」は 50.6%(男子 31.5%、女子 61.9%)であった。ゆかたは夏の風物詩として、花火大会やお祭りなどで多く着装されているが、きものに関しては 6 割以上が経験はあるが、そのほとんどが七五三のみであることがわかった。

3.2 授業前後のアンケート調査解析結果

事前事後の興味関心、気持ちなど 39 項目を集約して因子を抽出し、それら因子間の関連性を考察するため探索的因子分析(主因子法:プロマックス回転)を行った。

3.2.1 探索的因子分析結果

アンケート分析の結果、事前は 2 因子解、事後は 4 因子解が得られた。事前第 1 因子は 6 項目から構成され「衣服への興味関心」、第 2 因子も 6 項目からで「ゆかた着物への興味関心」と名付けた。事後のアンケートの解析結果より得られた第 1 因子から第 4 因子を各々「ゆかた着物関心、意欲、高揚感」「ゆかた理解習得」「伝統文化関心」「ゆかた拘束感」と名付けた。これら 6 因子間の相関係数は、「ゆかた拘束感」以外全ての因子間に 0.1%水準で有意に相関がみられた。中でも「ゆかた着物関心、意欲、高揚感」と「伝統文化関心」は最も相関が高く、関係が深いことが明らかとなった。6 つの因子に関して、伝統文化経験度を高群-低群に分け t 検定を行った。「ゆかた拘束感」以外全てで 5%水準以上の有意であった。「ゆかた着物への興味関心」が特に寄与しており、伝統文化の経験がきもの文化への関心に強く関与していることが示された。

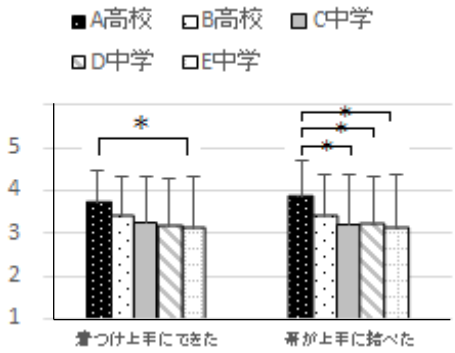

図 1.ゆかた理解習得の平均値

3.2.2 中学生と高校生の比較

学校(5 校)が 6 因子に影響するかと「ゆかたを一人で着られるようになりたい」について一元配置の分散分析を行った結果、全ての因子が 0.1%水準で有意であり平均値は、「衣服への興味関心」と「拘束感」以外は学年の上昇に伴い上昇した。授業内容はほぼ同じなので、精神的成長が伝統文化への意識や、理解度へ及ぼす影響は大きいと考えられる(図 1)。授業前後で「自分でゆかたを着てみたい」「きものを着たい」「ゆかたの TPO に興味ある」「きものの TPO に興味がある」を t 検定で分析した。中 1 の E 校が前後での有意差が最も大きかった。興味関心の上昇が 1 回の授業で最も効果的に現れた。ゆかたの着装後に何を扱うかは、精神的成長の高い高校生はきもの文化への学習につながるが、中学生は難しく体験して高揚感を味わい、伝統文化への興味を高める学習が適当であるといえる。アンケートの自由記述の考察や教師へのインタビューの結果に関しては、学会発表で報告する。